

〔「建国1100年 高麗—金属工芸の輝きと信仰—」展によせて〕
東アジアと高麗の金工品
—観音信仰と鏡像—

高麗時代は仏教が篤く信仰されて数々の仏画や仏像が制作されていますが、東アジアの中で仏教を介した交流を示す一例として鏡像（線刻鏡）が挙げられます。鏡像とは仏像などが線刻された鏡や銅板で、朝鮮半島での現存作例は高麗時代後期のものが主となります。高麗仏画の画題では「水月（楊柳）観音図」が多く、一例として「楊柳観音図」（図1 高麗・十三世紀 絹本着色 大和文華館蔵）が挙げられます。鏡像に線刻される図像も高麗における観音信仰の隆盛を反映して観音像が最も多く、日本の鏡像とは異なり、鏡だけではなく銅板の両面に図像があらわされるものが多いことも特徴です。「水月観音・宝塔鏡像」（図2・3：描き起こし図 銅製鑄造 高麗・十三世紀後半～十四世紀 個人蔵）は円形の銅板の表裏両面に水月観音図と五層宝塔が蹴り彫りされた鏡像で、上部に懸垂用の孔が一つ所開けられます。図像表現は繊細というよりものびのびとした線による大らかな作風です。



図1

また、観音菩薩があらわされた鏡像には『法華経』に説かれる諸難救助の場面が盛り込まれたものもあります。朝鮮半島では観音の住处とされる補陀落山に洛山（現在の韓国江原道襄陽郡の洛山寺とされる）が充てられ、観音の聖地として現在においても信仰を集めています。高麗時代の僧である一然（1206～1289年）が撰じた史書『三国遺事』卷三には、新羅の僧義湘が海辺の窟内で観音菩薩の真容を見たとする説話があり、そのために「洛山」の名が付けられたとされます。高麗時代の観音信仰は航海安全への願いが強く、航海時に船先などに懸けられたのではないかと考える場合があります。鏡像は小形で、懸けるための孔がつけられたものが多いため、携帯して日常的に礼拝する念持仏として用いられたと考えられるのです。

また、鏡像は高麗のみで作られたのではなく、実は中国、日本の方が年代の早い作例が残されています。現在の中国浙江省周辺を統治した呉越国（907—978年）では、鏡像（中国では「線刻鏡」と呼ばれます）は十世紀後半には制作されており、十世紀後半以降日本でも盛んに制作されています。崇仏国家であった呉越国は日本及び高麗に



図2 表面（描き起こし図）

使者を遣わして、唐末に散逸した仏教典籍を求めており、高麗からは僧の諦観が呉越国へ經典を届けています。また、渡宋した日本僧の尙然は985年に呉越国の故地である台州で仏像を制作、請求しており（京都・清涼寺蔵木造釈迦如来立像）、胎内からは水月観音鏡像が発見されています。この鏡像は、鏡面に先の尖った工具で引っ掻いたような、細く浅い刻線で図像があらわされています。

高麗でも信仰された水月観音は中国晩唐の画家である周昉が創始したとされる観音像で、観音のくつろいだ姿勢と竹などの背景描写が特徴とされます。晩唐時代の画家伝『唐朝名画録』には、周昉の絵が貞元年間（785—805年）に新羅人により朝鮮半島に伝わったと記されているため、その際に周昉の代表的な画題の一つであった水月観音像が渡った可能性が指摘されています。

呉越国及び日本と高麗の鏡像に年代的な隔たりはありますが、現存作例の不足を水月観音の伝来と流行を考慮することで補うと、仏教を通じた交流によって鏡像が東アジア内で伝播した様相をうかがうことができるでしょう。

そして今回新たに確認された高麗の鏡像が「如来鏡像」（図4：描き起こし図 銅製鑄造 高麗・十二世紀 東京国立博物館蔵）です。円形の鑄銅板の片面に如来坐像が細い線で刻まれています。

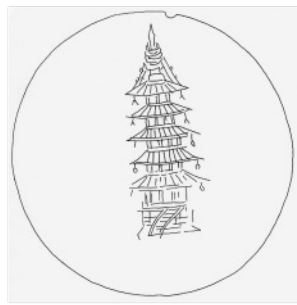


図3 裏面（描き起こし図）

鑿を用いて線を刻むのではなく、先の尖った工具で引いた浅い線のために、実際に観察しても如来の姿は見いだしにくいですが、正面を向き、両手を腹前で組むような仕種をして、蓮華座の上で結跏趺坐しています。現存する高麗の鏡像は多くが銅板の両面に図像が線刻され、線刻技法は蹴り彫りを主としています。それに対して、この作品に見られる先の尖った工具で引っ掻いた細く浅い刻線は、東アジアの中で最も早い十世紀に中国の線刻鏡に見られます。高麗の鏡像は鏡胎に像が刻まれるものから銅板に刻まれるものへと展開していきませんが、本作品は高麗に特有の形式・表現を持ちながら、中国の線刻鏡との関わりを示しているため、現存する高麗の鏡像の中でも早い時期に属すると考えられます。

さらに、高麗時代にはやはり個人が携帯した念持仏として用いられたと考えられる小仏龕があります（展観案内左図参照）。これらは金や銀の高価な材質を用い、高麗時代に好まれた唐草文を主とする文様が精緻に施されるものが多く、精巧に作られています。同様の用途を持つものとして鏡像と小仏龕を比較すると、鏡像はより広い層に用いられるために作られた可能性が考えられます。今回の展覧会では、王族や貴族が文化を担った高麗において、個人も含めた様々な仏教信仰のあり方を見ることができます。

（瀧 朝子）



図4 表面（描き起こし図）

季刊 美のたより No.204

平成30年 10月 1日

発行 大和文華館